

Web セミナー 絵本の見方・読み方・選び方

絵本は読書の入り口である。だからこそ、家庭や園で、絵本に親しめる環境を作ることが重要である。その環境を作るためには、子どもが楽しむことのできる「よい絵本」を選ぶ必要がある。また、絵本は子どもだけでなく、大人も楽しめることも大切である。

まず絵本とは、言葉と絵の総合芸術であり、主に子どもが作品世界を絵の力を借りながら楽しみ理解するものである。

ここで言う「よい絵本」の定義とは何か。①言葉がよいこと。②絵がよいこと。③言葉と絵が合っていること。④場面同士がつながっていること。があげられる。

1つ目の言葉のよさとは無駄な言葉がないこと。また、言葉とは意味と響きを指す。リズムを刻んでいるものもよい。音の響きの面白さから、想像することができる。面白いと思うことで、何度も読んでほしいと子どもは思う。面白いと思って、何度も読んでもらうことが、子どもが言葉を覚えることにも繋がる。

2つ目に絵がよいことの重要性について。子どもは、絵で作品世界を楽しむ。だからこそ、絵のよさが子どもの作品世界の理解をするための手助けとなる。

3つ目は、言葉と絵が合っていることが重要である。両者が矛盾していると子どもの理解の妨げになる。大切なのは、絵と文が調和して、さらに内容が豊かになっていることである。

4つ目は、場面同士がつながっていることである。前後のつながりが悪いと、読者は混乱する。ストーリーが繋がっていないと、読み手側にも読みづらい。また、例として写真絵本は場面展開に合った写真を揃えるのが容易ではなく、つながりがつくりにくい。場面展開が繋がっていないと、物語としての理解をすることが難しくなる。ゆえに場面同士のつながっていることが重要となる。

また、子どもに対する個別の配慮も重要である。目の前の子どもたちが好きなものを選ぶ必要がある。どういうことに関心を持っているのかを把握し、その子にあった絵本を選ぶ必要がある。多くの子供たちが好む、動物、食物、乗り物が登場する絵本として『ぐりとぐら』が例として挙げられていた。

以上のような点に配慮することで、良い絵本と巡り合うことができる。

次に絵本の読み方について2つ述べられていた。1つ目は、押し付けないこと。子どもの思いを大切にする。感情を込めすぎず、むしろあっさり読むくらいがよい。

2つ目は、感想は聞かない。読んだら読みっぱなしにする。それは、子どもたちが作品世界を純粋に楽しむためにも必要なことである。楽しむことが、その後の本好きにつながる。

さらに裏表紙までしっかり見せることが重要となる。ページをめくったら、間をおいて読む必要がある。それは子どもが絵を楽しむ時間をつくるである。物語が裏表紙まで続くこともある。

見返しにも意味があり、絵本に合わせて作られており、作品世界の表現の一つとして重要な役割を担っている。

また、絵本の文法というものがある。それは作者が読者に有効に伝える方法を指す。絵本

の文法について、3つのポイントを挙げられていた。

1つ目が登場者の向きについてである。絵本をめくる向きに登場人物が進んでいくように描かれる。ネガティブなときには登場人物が反対方向に進むこともある。これは、登場人物の心理状況を伝えやすくするために用いられる。

2つ目は、大きさを表現する技法についてだ。主な技法として、立ち落としが挙げられる。部分のみを描くことで、大きさを表現する技法である。登場人物との大きさの違いが、分かりやすくなり、作品世界を理解しやすくなる。

3つ目は、描かれたものについてだ。安定を表す際には満月が用いられ、不穏さを表す場合三日月が用いられることもある。満月は登場人物の満足感を表す場合もある。物語が前向きに終わっていることを表現できる。

実際に絵本を選ぶのは難しい。1つの方法として、絵本はベストセラーよりもロングセラーを選んだほうが良い場合がある。なぜなら、ロングセラー作品は、長い時間をかけて、子ども、保育者、保護者から受け入れられてきた作品だからである。

絵本は、読ませるものではなく、読んであげるものである。

絵本を選ぶ場合に、今回の講義の内容を参考にすると、子どもたちを作品世界へと誘い、子どもたちの楽しみを子どもたち自身の中に育み、読書への興味を湧かせていくのではないだろうか。